

平成州紙



おりおりの記

## 思い出「疎開児童」

キヤノングローバル戦略研究所  
理事長

福井 俊彦

国民学校3年生の頃、私は故郷（大阪）を離れ、四国松山の郊外（今の伊予市）へ疎開した。凡そ70年経つが、当時のクラスメイトとは今でも文通しており、もう暫くすると、皆で傘寿のお祝いをする約束となっている。

疎開先でよく勉強をしたという自覚は乏しい。その代わり、皆で鶏の世話をしたり、兎の餌を探したり、山羊や豚の飼育をしたり、山林の間伐の手伝いに駆り出されたり、野山を駆け巡る生活をしたことを憶えている。

自分では割と速く新しい仲間馴染んだ積りだったが、地元の生徒の目には都会からやって来た生意気な少年と映ったらしく、時には苛められた。登校して机を開くと薄気味悪くヘビが頭を擡げるといった類いだ。苛められれば苛め返さないと私の気性が許さない。先生は黙って観察しつつ、やがてどちらが悪いかが判定を下される。苛めた地元の生徒の方にお諭しをされることが多かった。ただ一度だけ、私の方が悪いと厳しいお叱りを頂戴したことがある。しつこく私を苛める餓鬼大将が実は泳ぎを苦手としているとの情報が入ったので、仕返しにこの生徒を小川へ投げ込んでしまった時のことである。先生の判定は、「苛めた彼は勿論悪いが、そのような苛め返しをするようでは君の方がもっと悪い」ということであった。罰として教室の後方に長時間立たされた。初めのうちは不当な罰だと感じたものの、しばらく黙考して

いるうちにフェアな判定だと思えるようになった。翌日以降、この先生の指示なら何でも素直に従おうという気持ちが湧き、学校が好きになった。

国民学校4年生の頃には戦局は

益々わが国に不利に展開し、四国においても空襲警報が頻発されるようになった。現在の松山空港は、当時帝国海軍の航空基地であった。ミカン山で寝そべて眺めていると、敵機（B29）は高知県の方角から四国山脈を越えて飛来し、わが航空基地を爆撃する。漫画の本には爆弾は戦闘機のお腹から真っ直ぐ下に落ちるように描かれているが、B29の爆弾は斜めに落ちて行く。発射のタイミングが私の頭の真上であったり、やや後方であったり、やや前進してからであったり、毎回異なるが、全て遙か前方の基地に命中する。風向きや風速を正確に織り込んでいることが分かる。この時、私は理科と数学を確り勉強しなければならぬと覚悟を固めた。

その私が大人になって何故か文系に進むこととなった。運命の悪戯としか言いようがない。

